

ロボットは介護の助けになるのか？

◆介護従事者の負担低減と生産性向上を目的とした介護ロボット

政府は、「ニッポン一億総活躍プラン」の中で、介護離職を無くし、国民が安心して働けるようにするための施策として、介護環境の整備を挙げている。そして不足する介護人材を確保する手段として、介護ロボットを使った介護従事者の負担低減と生産性の向上を図るとしている。矢野経済研究所の発表（2016年6月）によれば、15年度の国内介護ロボット（コミュニケーションロボットを除く）市場は約11億円であり、前年度比5.5倍に増加した。20年度には、約150億円に達すると予測している。

厚生労働省が12年に行ったアンケート調査によれば、介護従事者が介護ロボットに期待する点として、要介護者の移乗支援時や入浴支援時における、中腰での作業による足腰への負担の軽減を挙げる声が過半数を占めた。

◆評価の高い装着型移乗支援ロボット、継続使用には改善が必要

16年4月、神奈川県は、老人ホーム30施設を対象に、サイバーダインの装着型移乗支援ロボット「HAL介護支援用（腰タイプ）」を試験導入した結果を発表した。それによると、疲労感が減少したと評価する介護従事者は8割を超え、約8割の23施設で、前年度と比較して、介護従事者の離職率が低減した。

一方、HALには、「装着と調整に時間がかかる」「コストが高い」「装置が重い」「バッテリー稼働時間が短い」といった課題が指摘されており、日常的に継続使用されるには改善が必要だ。比較的安価で、軽くて装着の簡単なスマートサポートの「スマートスーツ」のようなタイプに人気が集まっている。特に、介護の主力である女性介護従事者においてスマートスーツは、使用頻度が高い。

現状、介護ロボットが介護従事者の生産性を上げて、介護従事者不足の改善に直結するわけではない。しかし、一部の介護ロボットは介護従事者の肉体的負担を減らし、介護の労働環境を改善することが明らかとなっている。改良を加え、より安価で、使い勝手の良くなった介護ロボットが登場し、介護従事者のパートナーとして活躍する時代も遠くない。

【毛利光伸】